星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.17　109～122（2021）

教育研究活動

みんなで知ろう、守ろう、地域の自然
――「武蔵野の森を育てる会」からのメッセージ――

田　中　純　江

はじめに

住宅街に残された雑木林（武蔵野市立境山野緑地（さかいさんやりょくち））における生態系の保全・回復を目指して発足した市民団体「武蔵野の森を育てる会」の会員として、筆者は会の発足（2005 年）以来、緑地の保全活動に参加している。「武蔵野の森を育てる会」では、雑木林に豊かな生態系を取り戻し、未来の子どもたちへつないでいくために、月 2 回の定例作業をはじめ、生き物等の調査、地域の環境イベントへの参加、他団体との交流・情報交換等、多方面にわたる活動を行っている。

近年、気象災害の増加と被害の深刻化から、環境問題に対する人々の注目度は高まっている。環境に対する人々の意識の高まりは、持続可能な開発目標 SDGs が急速に社会に受け入れられていることからもうかがわれる。しかし、人々の自然との付き合い方が持続可能な方向に向かっているかと言えば、必ずしもそうとは思えない。例えば、繁茂する外来植物は地域の生態系にとって脅威となり得るが、それについて危機感を抱いている人は決して多くない。多くの人にとっては自然との触れ合いの機会は限られており、地域の自然、とりわけ生態系については、ほとんど意識されていないと考える。これでは、将来にわたって自然を守りながら利用していくことはできない。

「武蔵野の森を育てる会」では 2021 年度､境山野緑地の自然について知ってもらうために、一般市民に向けて A4 判表裏 2 ページ、カラー印刷の『森の会だより』を、紙媒体（地域の公共機関で配布）と、デジタル版（ホームページにアップ）で発行することになった。『森の会だより』で知らせたいことは 2 点ある。その 1 つは、緑地の自然状態であり、2 つ目は、そこで行われている保全活動である。

本稿では､『森の会だより』でこの半年間どのようなメッセージを送ってきたかを振り返り、今後を展望したい。なお、『森の会だより』の執筆及び現地の写真撮影は、「武蔵野の森を育てる会（以後、森の会）」の会員が行っている。原稿の執筆者は記名としている。編集は筆者が担当し、読みやすく分かりやすい紙面になるよう心がけている。

1．境山野緑地の生物

『森の会だより』では、境山野緑地の植物と、昆虫や鳥などの生き物を紹介している。境

星槎大学共生科学部

山野緑地の生態系の特徴を一言でいえば、「里山」である。歴史を紐解くと、17 世紀中ごろ、江戸の町の急拡大に対応するため多摩川の水を江戸に送る水路として玉川上水が開削された。これを機に、武蔵野台地における水事情は大きく好転し、荒野が次々に新田開発されていった。新田開発では農地・屋敷林・雑木林がセットになっており、里山としての土地利用が始まった。玉川上水沿いにある境山野緑地も、このような雑木林の一つと考えられている。

しかし、人が自然を様々に利用しながら持続可能な状態で維持してきた里山の生物多様性は、産業構造の変化に伴い、今日では質量ともに危機に陥っていると言われている。境山野緑地も例外ではない。これに対して、SDGs の目標「15. 陸の豊かさも守ろう」のターゲット 15.5 には、自然生息地の劣化を抑制することや、生物多様性の損失を阻止することが挙げられており、森の会の目指すところと一致している。『森の会だより』もこの考え方に沿って発行されている。

表１　『森の会だより』に掲載した生き物と植物　（括弧内は執筆者）

2021年	第１号	第2号	第３号	第4･5 合併号	第６号	第７号
発行月	５月	６月	７月	８月	10 月	11 月
生き物	**オオミズアオ** (大上茂雄)	**シジュウカラ** (大上茂雄)	―	**クワコ** (大上茂雄)	**サトキマダラヒカゲ**(大上茂雄)	**キタキチョウ**(大上茂雄)
	大きくて美しい蛾。産卵直後のオオミズアオと、生んだばかりの卵を発見した。	シジュウカラの巣から顔をのぞかせるヒナの様子。その後の、巣立ったヒナの姿も捉えた。	―	カイコの祖先と言われるクワコが、緑地内でクワの葉を餌にして生息している。	雑木林のチョウ。定期的に実施している調査で個体数の増加を確認。	ハギの花の辺りで成虫が飛び回っていた。周りを観察すると、卵と幼虫が見つかった。
植物	**ウツギ** (荒井奈美子)	**チガヤ** (荒井奈美子)	**カタバミ** (高橋正行)	**ハエドクソウ** (荒井奈美子)	**ゲンノショウコ** (荒井奈美子)	―
	俗称は卯の花、ユキノシタ科。「卯の花のにおう垣根に･･･」と、歌にある。	緑地に小群落がある。若い花穂は甘いのでしゃぶって味わえる。	身近な植物だが、外来種が多いことや、種と球根とで増えることを紹介。	汁がハエ取り紙に使われた。木陰に花の白が映える。	別名ミコシグサ。下痢止めの薬になる。当緑地には白花が咲くが、赤紫色もピンクもある。	―
	カキドオシ (高橋正行)	**オオバコ** (高橋正行)	**ヒメヤブラン** (荒井奈美子)	**クヌギ・コナラ**(戸原辰一)	―	―
	緑地内でよく見られる。地面を這う。3～4 月頃むらさきの小さなかわいい花。葉をもむとスッとした香り。	歩道のわきなど、人に踏まれやすい場所で良く育つ。緑地内でよく見られる。	丈が低く、花の色は地味で見つけづらいが、よく見るとまさにランで美しい。	どちらも５月頃花が咲く。昔から炭に利用。現在、実生を育成中。エコリゾートの庭の木はここから移植。	―	―

表１は、『森の会だより』に掲載した生き物と植物を一覧にしたものである。表中の文章は原文から取り、括弧内に執筆者名を記した。記事の背景や詳細について以下に記す。

１）生き物

『森の会だより』５月号では、オオミズアオ（図 5-1）という蛾を紹介した。一般的な蛾のイメージとは異なり、羽を開くと 10㎝ほどもあり、淡い青緑色の大きくて美しい蛾である。当緑地では、成虫を見る以外に、人目を惹く羽だけが落ちていることもあり、しばしば話題に上る。

６月に紹介したシジュウカラ（図 5-3）という鳥は、当緑地でよく見られるが、木にある巣から顔をのぞかせたヒナの写真撮影（図 5-2）は初めてのことだった。これにより、改めて繁殖が確認された。

８月、カイコの祖先と言われるクワコ（図 5-6）が生息している様子を伝えた。小学生が学習の一環で育てることもあるカイコは、絹糸をつくるために家畜化されていて飛べない。一方、緑地に生息しているクワコは野生の蛾であるから飛翔もできて、繁殖している。クワコは多くの人が知る目立った昆虫ではないが、保全活動をしている当会としては、野生のクワコが境山野緑地にいることを貴重なことと受け止め、これからも大切に見守っていきたいと考えている。

10 月に紹介したサトキマダラヒカゲというチョウ（図 1）、は、他のチョウと違って花の蜜を吸わず、樹木の樹液などを吸い、雑木林のチョウとも言われる。幼虫の食草は緑地内にも生えているタケ・ササ類である。境山野緑地では最近サトキマダラヒカゲが増加していることが、調査によって確認されている。

11 月に紹介したキタキチョウは、2㎝ほどの小さなチョウである（図 3）。紹介文にある通り、執筆者はハギの葉にあった虫くいの跡から、幼虫がここにいるに違いないと見当をつけて探し始めた。粘り強く時間をかけて探し続け、ついに 1㎜にも満たないキタキチョウの卵と、保護色でハギに紛れている幼虫とを見つけ出すことができた。

２）植物

表１にある通り、『森の会だより』でこれまでに紹介した植物は、ウツギ、カキドオシ、チガヤ、オオバコ、カタバミ（図 5-5）、ヒメヤブラン、ハエドクソウ、クヌギ、コナラ、ゲンノショウコ（図 2）の 10 種類である。

里山の雑木林を構成する主木であるクヌギ・コナラ（図 4 下の写真、クヌギ・コナラを主とする若い林）は、落葉高木で、境山野緑地には様々な樹齢のものがある。一方、ウツギは落葉低木であり、昔は、畑などの境界によく植えられていた。境山野緑地のウツギは他地域から移植したものではなく、実生（みしょう、種から発芽したばかりの植物）から生長したものである。この地域で利用されていたウツギに由来しているのではないかと推測できる。

カキドオシ、オオバコ、カタバミは、あちこちの道端や草地でよく見かけるため、かえって人々から注目されにくいが、よく見ると愛らしい花をつけたり、生息域を広げる独特の方

法を持っていたりと、興味深い。チガヤ、ヒメヤブラン、ハエドクソウ、ゲンノショウコの中には、かつて人の暮らしとの関わりが深かった植物がある。

カタバミについては葉が家紋のデザインに取り入れられている。8月のハエドクソウは汁をハエ取り紙に利用してきた。10月に紹介したゲンノショウコ（図2）は、よく効く下痢止めとして活用されていたとのことである。

先に触れた樹木のクヌギやコナラは、人々の暮らしには必須であった。どちらも樹木としての成長が早く、薪や炭に適した木として、また、落ち葉は堆肥として利用され、人々の暮らしを支えていた。

以上、生物多様性を保全するという観点から、境山野緑地に生息・生育している在来種について、『森の会だより』で何をどのように伝えてきたかを述べた。次は、「森の会」の活動に焦点を当てて、「境山野緑地」の生態系をどのように守ろうとしているかを、具体的に述べる。

２.「武蔵野の森を育てる会」の活動

住宅街の中にある「境山野緑地」の生態系は、人が手を入れることで維持されている。そこで次に、森の会の活動について述べる。森の会が行ってきた活動は多岐に渡り、ササを刈るなどの直接保全に関わる作業以外に、調査・研修や環境教育なども行っている。それらの活動もやはり「境山野緑地」の保全を適切に進めるためには必須である。そこで、ここでは、感染防止に努めながら森の会が行ってきた様々な活動について、『森の会だより』で一般市民に対してどのように伝えてきたかを報告する。表2は、2021年5月～11月に『森の会だより』で取り上げた森の会の活動であり、それを内容別に分類したものが表3である。

１）様々な活動

2021年5月～11月に『森の会だより』で取り上げた森の会の活動は、下記の通りであった。便宜上、記事を掲載順に並べ、①～⑩の番号を付けた。

① 定例作業

森の会が毎月2回行っている定例作業の日時と参加者数を表2にまとめた。4月の定例作業は、4月11日（18名参加）と、4月25日（22名参加）であり、その後10月までの合計は14回（図5-4は、7/11定例作業の始めの会の様子）、1回あたりの平均参加者数は23.9名であった。大勢の力が集まった結果、様々な作業に取り組むことができた。

② 保全活動

保全活動とは、直接緑地の保全のために行う活動であり、定例作業日や臨時作業日に行う（図2、最近の活動より）。ゴミ拾いは毎回、草刈りやササ刈りなどは場所を限定してほとんど毎回行っている。樹木に関しては、計画的に、剪定や移植を行う。表2に示すように、第1号と第2号には、4月と5月の保全活動が詳細に紹介されている。第1号のCに示した「外来種管理」とは、外来種の除去を意味しており、生態系被害防止外来種リストに掲載されて

表２ 「武蔵野の森を育てる会」の活動（2021 年４月～10 月）
～『森の会だより』より～

		第1号	第２号	第3号	第4・5合併号	第6号	第7号
発行月		5月	6月	7月	8月	10月	11月
定例作業	月日 (人数)	4/11(18) 4/25(22)	5/ 9(24) 5/23(22)	6/13(16) 6/24(8)	7/11(28) 7/25(37)	8/21(6) 8/29(30) 9/ 5(16) 9/19(29)	10/10(39) 10/31(39)
活動内容・情報発信	A	**保全活動** **4月** ・ゴミ拾い、菓子袋や空き缶など。 ・道しるべの木をそろえて、散歩道の目安に。 ・枝の剪定や樹木の移植	**保全活動** **5月** ・ゴミ拾いと林床の整備 ・遠路の清掃と除草 ・外来種管理 ・樹木の剪定・ササ刈り ・実生苗の移植	**環境教育** 6/11 第二小学校3年生80名身近な自然の生き物探し。事後アンケートによると、楽しかった子93%勉強になった子94%。	**多様な参加者** 7/11 この日会員は12名。他には中学生チームの9名、小学生を含む家族3名、その他市民の皆さん4名を迎えて9時にはじめの会。出会いの自己紹介後、一緒に作業。	**環境教育** 9/17 第二小学校1年生81名グループに分かれて虫探しをした。捕まえたバッタなどは学校で飼育。	**環境教育**10/14 第二小学校5年生51名地域の自然、特に雑木林について学ぶ。セカンドスクール（宿泊学習）の事前学習。
	B	**市民団体として** 武蔵野市との協働により武蔵野市立境山野緑地（独歩の森）の保全活動を行っている。	**世界環境デー紹介** 6月5日は世界環境デー。昨年のテーマは生物多様性、今年のテーマは生態系の回復。	**臨時作業** 必要に応じて臨時作業をしている。5/24～6/12の間には4回実施した（延べ15名参加）。	**生き物調査** 7/25 朝7時半から会員4人による生き物調査。並行して9時からは通常の定例作業も実施。調査の結果は保全活動に生かし、再び調査と、循環する。	**会員のつぶやき** 「生物多様性を思う」（松本潤一）境山野緑地、住宅地に囲まれた雑木林を皆で手入れをして守っていく。笹刈りした草地には…	**市民会館文化祭参加** 10月、武蔵野市民会館文化祭に出展。境山野緑地で見られる生物を写真で紹介。
	C	**外来種管理** セイヨウタンポポ（生態系被害防止外来種）除去。				**地域フォーラム** 「独歩の森のナラ枯れを考える」第1回・2回の案内	**地域フォーラム** 「独歩の森のナラ枯れを考える」報告と今後の予定

いるセイヨウタンポポの除去を実施した。なお、作業の内容は、当日の参加者数、季節や当日の天候、あるいは外来種を含む緑地管理上の課題等を考慮して決めている。

③　市民団体としての連携（市役所）

森の会が行う境山野緑地の保全活動は、武蔵野市との協働で行っていることを紹介した。詳細については、森の会のホームページを閲覧できるよう QR コードを載せた（参考 URL：

http://mnomori.web.fc2.com/　武蔵野の森を育てる会)。

④　世界環境デー紹介

毎年6月5日は、国連の定めた世界環境デーであり、昨年は「生物多様性」、今年は「生態系の回復」がそれぞれテーマであったことを紹介した。これらはどちらも、「境山野緑地」の保全を考えるときのキーワードである。

⑤　環境教育－小学生体験型授業－

森の会のメンバーが講師となり、境山野緑地において、武蔵野市立第二小学校の体験型授業が3回実施された。1回目は、3年生（生き物探し)、2回目は1年生（虫探し、図1)、3回目は5年生（雑木林について学ぶ、図4）であった。それぞれのテーマに沿って、緑地の自然と触れ合い、地域の自然についての理解を深めた。

⑥　臨時作業

定例作業では手が回らないことについては、適宜臨時作業を設定して、都合のつく会員が作業に当たることにしている。5月24日～6月12日の3週間では、臨時作業を4回設けて延べ15名が活動した。この時期は植物の活動が活発なため、頻繁に臨時作業を組んだ。

⑦　生き物調査

森の会の生き物調査グループが、6月～10月、毎月昆虫調査を行っている。『森の会だより』に載せたのは、この内の1回についてである。昆虫調査以外の調査としては、鳥調査を夏と冬に、地上徘徊性動物調査を夏に、また、植物の調査を春と秋に行っている。調査結果は、保全活動に活用するとともに、まとまった段階で公表している。

⑧　会員のつぶやき

森の会の会員として、仲間と共に境山野緑地の雑木林の手入れ活動に参加して感じた様々な生き物の存在について、「生物多様性を思う」として表現した（全文は図2に掲載)。

⑨　武蔵野市民会館文化祭

市民会館文化祭に、緑地の生物の写真などを出展した（図3)。鳥や昆虫では、オナガ、キビタキ、オオミズアオ、コオニヤンマ、モズ、ヤマガラ、ウラナミアカシジミ、シオカラトンボなどを紹介、植物を含むいろいろな生物の写真を展示した。来場者からは、「近くにこんなに生き物がいるなんて知らなかった。」などと、驚き喜ぶ声が聞かれた。

⑩　地域フォーラム

2021年の夏、境山野緑地の雑木林でナラ枯れが大発生したため、これを地域の課題と捉えた西部コミュニティ協議会が、森の会との協働で、市民を対象に4回連続の地域フォーラムを開催した。その1回目は、現地見学会として、境山野緑地の雑木林に市民約50名が集まり、大木が10本以上枯れてしまった状況を皆で確認した。『森の会だより』では、西部コミュニティ協議会のホームページで、地域フォーラムに関する情報が得られることを記して、周知に努めた（図2、図4)。

2）活動を分類する

上記の活動を、境山野緑地の保全の観点から、内容別に分類した。まず、活動の中心とな

る（1）**保全活動**がある。次に、保全活動を科学的な知見に基づいて適切に行うための、（2）**調査・研修**がある。さらに、保全活動が一過性ではなく継続していくためには、保全活動に対する理解の広がりと担い手の育成が欠かせず、そのための（3）**環境教育**と（4）**啓発活動**がある。最後にそれらの活動を支える（5）**他機関・他団体との連携**が必須で、全部で5項目となる（表3）。

表3　活動の5分類（緑地の保全を目指す立場から）

（1）保全活動 ①定例作業　②作業の内容　⑥臨時作業		
（2）調査・研修 ⑦生き物調査 （昆虫調査）	**（3）環境教育** ⑤境山野緑地での授業 （3年生、1年生、5年生）	**（4）啓発活動** ④世界環境デー紹介 ⑧会員のつぶやき ⑨市民会館文化祭への参加
（5）他機関・他団体との連携 ③市民団体としての連携（市役所）　⑩地域フォーラム（西部コミュニティ協議会）		

（注）武蔵野の森を育てる会（2016、p.6）をもとに筆者作成。

（1）保全活動

ここでいう保全活動とは、緑地を保全するために現地で行う作業のことである。定例作業や臨時作業として設定し、会員等が緑地現地で直接行うゴミ拾いやササ刈り・剪定などの保全のための作業を指す。保全活動に該当する記事としては、①定例作業、②作業の内容、⑥臨時作業があった。

ところで、保全活動は、対象とする場所によって地理的・社会的その他の条件が異なるため一様ではない。何を目指していつ何をどのように保全したらよいのかを、保全場所ごとに検討し実施していかなければならないため、現地の状況を正確に捉えるための調査が必要である。その他の一般情報や個別情報を得るための研修も欠かせない。

（2）調査・研修

保全活動を適切に行うために、境山野緑地では、昆虫・鳥・地上徘徊生物についての定期的な調査を行っている。⑦生き物調査（昆虫調査）の考え方を、以下に述べる。

昆虫調査を行う目的の一つは、昆虫の生育にとって適切な自然環境を検討するための情報を取得することである。例えば、昆虫の種数や個体数が減少したということが調査で分かった場合に、草刈りの時期や刈り方を変更してみることがある。その方法が適切だったかどうかを、次回の調査結果から推定することができる。調査結果を保全活動に生かし、保全活動の結果を調査で検証するというように、調査と保全活動とは循環しており、調査は保全のために欠かすことができない活動である。

研修の例として、コロナ禍以前は毎年実施していたバス研修について述べる。森の会では、雑木林の再生を試みている各地の団体の保全活動から知見を学ぶ目的で、複数年にわたって

バスを仕立てて10か所を超える雑木林の見学をしてきた。この研修が、「二小ゾーン」の萌芽更新にも生かされている。

(3) 環境教育

小学生が境山野緑地にやって来て、地域の自然について体験的に学ぶ授業の講師を森の会のメンバーが担う。近隣の小学生が境山野緑地の自然に親しみ、そこが大切に手入れされていることを知ることで、地域の自然への理解が進み、子どもたちもまた保全の担い手となることが期待できる。保全活動の輪を広げるという意味で、環境教育は保全にとって大切な活動であると考える。

(4) 啓発活動

一般の人々に対して、境山野緑地で見られる鳥などの生き物の様子を知らせ、そこを手入れしている会員の活動についても知ってもらう。また、世界的な環境への取り組みを紹介することも、緑地の保全への理解を広める大切な活動と考える。④世界環境デー紹介、⑧会員のつぶやき、⑨市民会館文化祭への参加が、啓発活動にあたる。

(5) 他機関・他団体との連携

境山野緑地が武蔵野市立の緑地であることから、市役所との連携なしには緑地の保全は成り立たない。また、今回の地域フォーラムの開催で連携した地域のコミュニティ協議会からの発信は多くの人に届き、4回連続フォーラム「独歩の森のナラ枯れを考える」への参加者は延べ186名に上った。

森の会は、地域に密着した団体であることから、同じように地域で活動している他団体との連携を大切にしている。それらの団体は自然系ばかりではない。福祉系、まちづくり系、子育て系など様々あり、どの団体も地域をより良くしていきたいという思いを持って活動している仲間であり、連携によってお互いのパワーを高めている。他団体との連携は境山野緑地の保全にとって欠かせない。

以上のように、境山野緑地の保全は多様な人が関わる様々な活動によって実現する、と森の会では考えている。

3.『森の会だより』の構成

ここまで、『森の会だより』の個別の記事について、緑地の保全の観点から内容を分類して紹介してきた。次に、境山野緑地で会員が撮影した写真を活用した紙面の構成について、『森の会だより』第6号と7号を例に紹介する。第1号〜5号は紙面の関係でここでは取り上げないため、主な写真のみ図5にまとめた。適宜参照されたい。

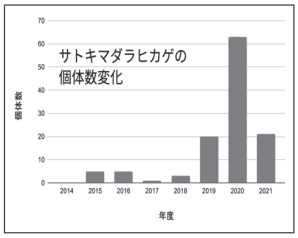
森の会だより

第6号
2021年10月1日
武蔵野の森を育てる会

雑木林のチョウ　サトキマダラヒカゲ

足は4本？

まさか！



個体数の増加　　雑木林のチョウ、サトキマダラヒカゲが、独歩の森でここ数年増えています（グラフ参照）。森の会では緑地の状態を把握するために昆虫調査をしていて、始めてからかれこれ8年が経ちますが、これには驚きました。2年半前に行った一部皆伐更新の効果か、コロナ禍で笹刈ができなかったからか、ナラ枯れで樹液がたくさん出ているからか、原因はまだ分かりません。

サトキマダラヒカゲといえば、足が2対しかありません。理科の授業では昆虫には3対の足があって、クモとかムカデは昆虫じゃありませんと教わりました。面白いですね。まだまだ9月中であれば見られるので観察してみましょう。

二小の1年生　虫さがし

9月17日金曜日に、武蔵野市立第二小学校の1年生81名が、境山野緑地に虫探しにやって来ました。写真の草地では、クビキリギス、オンブバッタ、コオロギなどを見つけてご機嫌です。一方、ついこの前までカナブンやシロテンハナムグリなどがどっさり見られた独歩の森は、様子が違いました。季節は秋へと変わっているのですね。

図1　『森の会だより』第6号 p.1

サトキマダラヒカゲが増加していることが調査で分かった。それを示した棒グラフが分かりやすいと好評だった。第二小学校は、境山野緑地のすぐ近くの学校である。当日を心待ちにしていた1年生は、グループに分かれて楽しそうに昆虫探しをした。

緑地の植物紹介　**ゲンノショウコ**

（フウロソウ科）

別名ミコシグサ。茎や葉を乾燥させたものは下痢止めの薬になります。抜群の効き目があるため現の証拠、これが名の由来です。　当地には白花が咲きますが、赤紫色もピンクもあります。花びらは5枚、おしべは10本、秋に種子を飛ばした後の殻は、先が丸まってミコシの屋根のよう。屋根の筋は5本、その下の星形の角は5つ。数はどれもが5か5の倍数、造化の妙ですね。　（荒井 奈美子）

生物多様性を思う

境山野緑地、住宅地に囲まれた雑木林を皆で手入れをして守っていく。
笹刈りした草地には春先んじて咲く花があり、
都会に珍しい虫や鳥たちが立ち寄る林となる。
土の中や草むらに感じる、生き物の気配。　（松本潤一）

★★　武蔵野の森を育てる会　最近の活動より〔8月・9月〕　★★

定例作業	月 日	時 間	作 業 等	参加者数
第9回	8/21(日)	9時～10時半	ゴミ拾い、笹刈り、園路の除草、道はき、他	＊ 6
第10回	8/29(日)	9時～10時半	ゴミ拾い、外来植物管理、剪定、他	30
第11回	9/5(日)	9時～10時半	ゴミ拾い、笹刈り、園路の除草、道はき、他	16
第12回	9/19(日)	9時～10時半	ゴミ拾い、外来植物管理、剪定、他	29

＊8月前半の定例作業が雨のため実施できなかったので、この日に集まれる会員のみで作業。

地域フォーラムのお知らせ

「独歩の森のナラ枯れを考える」
（西部コミュニティ協議会主催）

編集後記：「森の会だより」は、お寄せいただく感想に励まされながら、半年間発行を続けることができました。緑地の折々の様子と私たちの思いを、これからも発信していきたいと思っています。　（田中純江）

☆「武蔵野の森を育てる会」は生物多様性を大切に考えています。

①ホームページ：http://mnomori.web.fc2.com/
②ツイッター：https://twitter.com/mnomori1
③連絡先：info.mnomori@gmail.com
＊今後の作業予定は、①に載せています。

ホームページ　ツイッター　連絡先

図２　『森の会だより』第６号 p.2

８月前半の定例作業は雨のため実施できなかった。このように毎月２回の定例作業が雨等で実施できないときは、延期して実施している。

『森の会だより』では、毎号に、森の会のホームページ、ツイッター及び連絡先の QR コードを載せて、会へのアクセスを容易にしている。それに加えて第６号には、「独歩の森のナラ枯れを考える」の開催通知を載せて、地域フォーラムの周知に努めた。

森の会だより

第 7号
2021年11月1日
武蔵野の森を育てる会

キタキチョウが育っているよ

A

B

C

境山野緑地といえば雑木林というイメージですが、北側入り口には小さい植え込みがあります。秋になって植え込みのハギに花がつき、小さな蝶が集まってきました。ウラナミシジミやキタキチョウが花の密を吸ったり卵を産んだりしています。

Aの小さく丸い葉っぱをよーく見て下さい。これまた小さい直径1mmにも満たない卵が産み付けられています。この日は既に葉が食べられて無くなっているところがあったので、ここに卵を産んだに違いないと確信して探すこと数十分、ついにBのキタキチョウの幼虫と会うことができました。「こんにちは！」　　（大上茂雄）

クイズ･･･　キタキチョウの幼虫は、何を食べて育ったでしょうか？　（答えは裏）

市民会館文化祭に参加

10月15日～20日
武蔵野の森を育てる会展示

武蔵野市立境山野緑地で見られる生き物と植物の写真を展示。写真右上から下へ、オナガ、キビタキ、オオミズアオ、コオニヤンマです。2列目は、モズ、ヤマガラ、ウラナミアカシジミ、シオカラトンボと、続きます。展示した写真には希少種も含まれています。貴重な自然空間ですね。

緑地の掲示版に毎月掲示している季節の植物紹介も一挙に展示（写真奥）。見に来た方はどなたも、このような場所が近くにあると知って驚いていました。

図３　『森の会だより』第７号 p.1

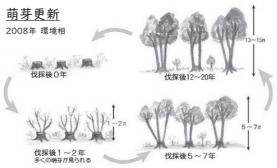
キタキチョウの写真（A には卵、B には幼虫）は、ぜひよく見てほしいとの思いから、文章や写真に注目したクイズを出してみたところ、子どもたちが興味を持った。

武蔵野市民会館文化祭は、39 団体が参加し、展示、公開学習、体験教室、自主企画、芸能発表等が、にぎやかに行われた。森の会の展示にも多数の参観者があった。

二小の５年生 森で授業

10月14日木曜日、武蔵野市立
第二小学校5年生50名
講師：武蔵野の森を育てる会

【雑木林の説明】（雑木林エリア「独歩の森」でお話を聞く）
　太くて高い木が茂っていますね。昔は、もっと木が細いうちに伐って、燃料にしていました。「伐ったら木がなくなってしまう。」と思うでしょう。ところが、なんと、また生えてくるのです。（萌芽更新のサイクル、左図）。そこで、木が育ったら、また伐って生活に使うでしょう。今度こそ森の木はなくなってしまった、でしょうか？
　驚いたことに、伐って、使って、育ててと、人々がお世話したおかげで、「独歩の森」はずっと元気な森だったのです。すごいですね！



コナラの大木を枯らすナラ枯れ コナラ：クヌギと共に雑木林を構成する主木
　以前、各地からマツ枯れ被害の話がありましたが、今、東京ではナラ枯れ被害が深刻です。「独歩の森」でもこの夏、太いコナラに多数の被害がありました（左上写真、トラップや赤テープは武蔵野市による対策）。枯れてしまった木は、倒木による事故防止や、ナラ枯れ菌拡散防止のため、伐採します。専門家によると、直径20cm以下の細い木は、ナラ枯れはほどんど発生しないそうです。

ニ小ゾーン：2005年に当時のニ小5年生と当会とで苗木を植えた場所。
子どもたちから、今度はぼくたちが何かをする番だ、という声が上がりました。

【ニ小ゾーンの更新地を見学】
　大きな被害をもたらすナラ枯れから森を守るためのヒントがニ小ゾーンにありました。ここは、第二小学校にゆかりのある場所で、2005年に当時のニ小5年生と当会とで、雑木林の苗木を植えました。14年後、よく育った木を全部伐ったところ、左の写真のように、切り株から出た芽が見事に育って、立派な雑木林になりました。多くの植物が育ち、それを餌にする昆虫などの生き物が増え、またそれを餌にする鳥もやって来て、どんどん自然豊かになりました（生物多様性の向上）。

地域フォーラムのお知らせ
「独歩の森のナラ枯れを考える」
（西部コミュニティ協議会主催、詳細はHP）
第3回：11月13日（土）
第4回：11月23日（火・祝）

西部コミセンHP

<10月の定例作業>
第13回　10/10(日)　39名参加
第14回　10/31(日)　39名参加
*ゴミ拾い、笹刈り、園路の除草、など

<クイズの答え>　**ハギ**

①ホームページ：http://mnomori.web.fc2.com/
②ツイッター：https://twitter.com/mnomori1
③連絡先：info.mnomori@gmail.com
＊今後の作業予定は、①に載せています。

① ホームページ　② ツイッター　③ 連絡先

図４　『森の会だより』第７号 p.2

「二小の５年生　森で授業」には、森の会より筆者を含む３名が講師として参加した。ここでの学習のポイントは２点あった。その１つは、従来雑木林で行われていた萌芽更新という持続可能な維持・管理方法についての理解、２つ目は、ナラ枯れのために、この夏、「独歩の森」の大木が何本も枯れてしまった出来事について知ること（図４上の写真、樹木に巻かれている赤色テープはナラ枯れの印、中央の講師は筆者）であった。

次に「二小ゾーン」に場を移した（図４下の写真、講師が説明中）。二小ゾーンとは、かつて二小の先輩たちが更地に植林した（2005 年 12 月）場所で、その木々が立派に育った後に萌芽更新を行い（2019 年２月）、現在、ナラ枯れの被害を受けることなく再び元気に育ち、そこには様々な生き物が生息している。「独歩の森」では多くの大木がナラ枯れの被害を受けたのに対して、二小ゾーンの細い木には被害がない。授業を受けた５年生は、このことを深く心に刻んだようだった。

写真撮影：武蔵野の森を育てる会
（画像の転載、複製、改変等は禁止します）

1．オオミズアオ
2・シジュウカラのひな
3．巣立ったばかりのシジュウカラ
4．定例作業で初めの打ち合わせ　(7/11)
5．カタバミ
6．クワコ

図５　その他の写真（第１号～第５号より）

おわりに

異常気象が取りざたされる昨今、環境問題が人々の話題に上ることが多くなった。これを、地域の緑地保全活動に取り組んでいる市民団体「武蔵野の森を育てる会」としては、身近な地域の自然環境に関心を持ってもらう好機ととらえ、『森の会だより』（毎月発行）というデジタル及び紙媒体での通信を発行することにした。『森の会だより』では、広く市民を対象に、武蔵野市立境山野緑地の自然状態と、そこで行われている保全活動とを、分かりやすく伝えることを目指している。

本稿では、2021 年度上半期の『森の会だより』を対象として、そこに掲載された植物や昆虫・鳥などの生物に関する情報と、「武蔵野の森を育てる会」が取り組んだ様々な保全活動（ゴミ拾い、ササ刈り、調査、環境教育、イベント参加等）について報告した。

『森の会だより』について人々から感想を聞く機会が増えており、徐々に認知されていることが感じられる。この影響もあるためか、最近、親子連れ、中学生・高校生、30 代・40 代の働き盛りの市民など多様な人々が、森の会の定例作業日にやって来て、会員と共に作業をすることが多くなった（図 5-4、写真の右側に並ぶのが当日参加の方々）。保全活動の広がりと、市民の関心の高まりが感じられる。

とはいえ、地域に暮らす多くの人が地域の自然に親しむには、まだ長い時間がかかるに違いない。親しみ触れ合うことが地域の生態系に対する理解につながるという考えのもと、皆で地域の自然を保全し、持続可能な状態で利用していくために、これからも『森の会だより』を通して、地域の自然に興味を持ってもらえるような情報を発信していきたいと考えている。

参考文献

環境省,「里地里山の保全・活用」, www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html,（2021. 12.8 閲覧）.

武蔵野の森を育てる会（2016）.『独歩の森は市民の財産～武蔵野の雑木林を未来へつなぐ～』, 創立 10 年報告書.

坪内俊憲・保屋野初子・鬼頭秀一（2018）.『共生科学概説　人と自然が共生する未来を創る』, 星槎大学出版会.

国際連合広報センター,「6 月 5 日は、世界環境デー、私たちの地球、私たちの未来、救うのは今！」, https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/1476/（2021. 12.8 閲覧）.